

次世代科学者育成プログラム グローバルサイエンスキャンパス

平成26年度全国受講生研究発表会

## 審査基準(確定版)

2014年10月

次世代科学者育成プログラム推進委員会

グローバルサイエンスキャンパス推進委員会

# 何を審査するのか

## 1. 次世代の科学者に求められる科学的探究能力の獲得度合い

次世代の科学者に分野横断的・共通的資質として求められる科学的探究能力、研究遂行能力の獲得度合いを審査する。

とくに、将来国際舞台で諸外国の人材に伍して活躍しうる人材を育てる観点から、自分の研究の意義や貢献がどれだけ適切に語れアピールすることができるかも重視して審査する。

## 2. 研究の専門的達成水準(研究の学問的寄与)

研究活動の学問的貢献度合いを、主として指導教員 & 専門分野に係わる教員のコメントならびに受講生の自己評価に基づき審査する。

研究が人・社会の切実な課題解決を志向した実用的・工学技術的な研究に対しては、その解決への貢献度合いのみならず、テクノロジーの達成水準についても併せて審査する。

### <考え方>

・次世代事業・グローバルサイエンスキャンパス事業は人材育成事業であって、受講生の発表の評価の第一の観点は、将来、科学・技術分野で(国際的に)活躍することが期待できる人材にどの程度育っているかをみることである。この点が、研究成果の学問的寄与の大きさが専ら評価される学会での発表とは異なる。高校生でありながら学問的な貢献に至る高い水準の成果を挙げることが不可能でないことは、これまでの実績が示すところであり、このような実績の向上を目指すことは重要である。しかし、高校生までの段階では、研究が学問的な貢献に至っていないものであっても、分野・領域横断的な科学的知識や思考力、研究への意欲と基礎的スキルを獲得し、将来のトップ人材としての早期の大成を準備するような探究的学習活動も高く評価されてよい。この意味で、とくに数学・情報・物理・化学などの分野においては、探究的学習成果が学校教育の内容を超えて高い水準に達している場合、学問的貢献と言いつる最先端レベルに到達していないとしても適切に評価されるべきである。すなわち、分野によって、上記「1.」「2.」の重点の置き方は異なってよい。むろん、研究の専門的達成水準が高いことは望ましいことであり、高い水準に達している研究は高い評価の対象となる。(研究の学問的貢献度合いの、より専門的・学問的評価については、専門分野の学会に委ねることが妥当である。)

・これまでの発表の大部分はどちらかと言えば興味関心追求型の基礎研究に属するものであったが、自分の身の回りや社会が抱えている切実な課題に共感を寄せ、その解決を志向した実用志向的な研究も科学研究への入り方の一つであり評価の対象とすることが適切と考えられる。ただし、その解決への貢献度合いのみならず、それを通して科学的探究能力をどのように伸ばし、将来のトップ人材としての資質・能力を獲得できているかを併せて評価する。

・将来、国際舞台で活躍するためには、自分の研究の社会的な意義や価値、自分のなしえた貢献がきちんとアピールでき他者に認めさせる力の育成も重要であることから、強調ポイントの一つとして今回も重視する。

・発表会での発表に対する審査は、教育プログラムそのものの評価を意図して行われるものではない。

# 「次世代の科学者に求められる科学的探究能力・資質」とは ～プログラムで目指したい人材像のキーワード～

## 高度で挑戦的な課題解決をめざす自主的探究能力を有した生徒

- **高度で独創的な科学的探究能力(自主的研究能力)**  
自分で課題を発見し、その学問的位置づけ・意義を理解し、自ら研究仮説・研究方法・研究計画を立案し、自主的に研究プロセスを粘り強く遂行する力
- **多分野横断的な思考力と高い自主的学習力**
- **‘高度な課題’ 解決への挑戦、原理・法則等の本質探究志向**
- **取り組み分野に関する大学学部相当(以上)の専門的知識・スキル**
- **高い数理的解析力**
- **豊かな国際感覚**
- **科学コミュニティ(ネットワーク)を形成・参画する力**

※高校段階終了時の達成イメージ。低学年段階と高学年段階の違いは、上記のキーワードの水準の違いとなる。上記は、仮説として提示中のものである。

※‘次世代の科学者’は、GSCIについては、例えば‘次世代の国際的科学家’とする等、国際性をとくに強調した表現も考えられる。

※受講生の多様な個性の尊重、個性に応じた対応はもとより大切である。たとえば、非凡な能力を有しながら他者とのコミュニケーションや人間関係をふつうに形成・維持することが困難な人がいるが、このような人材に対して、性急にそれらの力を求めることは適切ではないと考えられる。

※「豊かな国際感覚」とは、地球規模・人類共通の課題解決に関心を寄せ、そのための能力・資質を身に付けていこうとする態度や意欲を有すること。外国語による情報収集やコミュニケーションに意欲的に取り組もうとする姿勢も含む。また、自分の研究の社会的な価値や学問領域にとっての価値を適切に表現・アピールし、他者に認めさせる力も大切である。高校生段階では、将来、国際的に活躍するトップ人材に求められる資質として、バックグラウンドや意見・考え方の異なるメンバーの中でコミュニケーションを図りリーダーシップを発揮することや国際的なコミュニケーション能力を獲得することを目指す(異文化・国際的コミュニケーション力。ただし、今回の発表に対しては、明示的な審査項目とはしない。)

※上記のキーワードは、次世代の科学者に求められる資質・能力の中核的なものであるが、すべてではなく、学校教育や家庭、また学校・家庭と地域・社会の連携を通して培われる幅広い教科学力(基礎学力)、芸術的センス、体力を含む生きる力、また豊富な社会的体験、自然体験を通じた豊かな感性、知的好奇心、幅広い実践的基礎知識・技能、人間・社会の課題に関する興味・関心や共感性、科学・技術の役割に関する理解等も重要であり、上記のキーワードで示される力が成立し伸びていくための大切な要素と考えられる。

# 「研究発表」に求める要件

(プログラムを通して)科学的探究能力をどれくらい身に付け伸ばすことができたか、ならびに、研究の学問的・社会的意義や自らの貢献とは何かがわかる発表であること

- ・研究テーマのその分野・領域における位置づけ、意義(学問領域にとって・社会にとって・自分にとっての価値)について自分なりの理解ができていること
- ・研究テーマにおける仮説と目標が明示されていること
- ・研究で得られたデータと結果、それを元にした考察が明示されていること
- ・成果の自己評価(当初の目標に対して何がどこまで達成できたのか、何が明らかになったのか、その意義、未達成部分は何か)が適切になされていること
- ・研究プロセス全体において、自分の主体的な関わり・寄与がわかるものであること(自らの貢献をきちんとアピールすること) など

※研究にどのように粘り強く取り組み、各種のハードルを克服していったかということも発表の評価の視点の一つである。これは、ポスター等に明記する必要はないが、質問には答えられるようにしておくこと。

※研究テーマは新規のものであることが望ましい。しかし、科学的探究能力の獲得につながる先行研究の追体験や学校教育の水準を超える高度な水準の研究的学習成果の発表も可とする。

↓  
「審査基準」に具現化

↓  
「発表要旨」& 当日発表に反映

## H26年度「全国受講生研究発表会」発表の「審査基準」改訂案

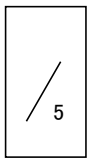
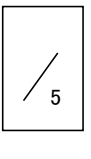
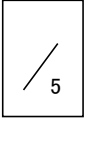
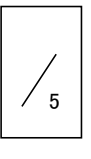
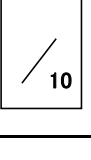

2014年10月

※発表に対して、各カテゴリーごとに評価項目を踏まえた5段階での評価を行います。

※減点主義的な評価ではなく、各カテゴリーの中で高く評価できる項目があれば該当カテゴリーの評価を高めます。(もちろん、どの項目も満たしていることが望まれます。)

※自分の研究の意義がきちんと語れ、アピールできているかどうかをとくに重視します。

※下記の「研究」には、学校で習う水準を超えた高度な課題探究的学習も含まれます。

カテゴリー		評価項目	評価	備考・留意点
目的・意義	研究テーマ設定の着眼点、独創性、位置づけ・意義の理解など	<input type="checkbox"/> 自分の研究の学問的・社会的意義がアピールできている。 <input type="checkbox"/> 研究テーマについての目的意識や仮説が明快である。(※1) <input type="checkbox"/> 研究テーマについて自分なりのユニークな視点が含まれている。(※2) <input type="checkbox"/> 研究テーマに関する先行研究や関連分野についてよく調べ、テーマの位置づけや背景を理解している。(※3) <input type="checkbox"/> 学校で習う水準を超える高度な内容をよく理解できている。(※4) <input type="checkbox"/> 高度な課題解決を目指しており挑戦的である。(※5)		*共通: 今回の研究が、どういう意義を有する研究なのかを聴く人に伝わるようアピールすること。研究の意義が伝わらない発表は評価されない。 *1 研究の目的・位置づけの理解がよくできており、目標が自分自身のものになっていること。 *2 自分なりの独創的な視点をきちんと強調すること。 *3 自立的な研究者への能力・スキル獲得につながる活動になっているかどうかを評価する。ここでは、テーマについてどれだけ自分で調べ、位置づけ・背景の理解ができているかを問う。 *4 新規のテーマでなくとも、先人の達成した理論・知識を探究的に学習し、学校教育の水準よりも高い水準の理解に到達していること示す発表も高く評価する。 *5 受講生には積極的に高度な課題に挑戦してほしい。その高い目標に向けて、今回の研究がどのようなステップ、位置づけにあるものなのかを示すこと。
方法・プロセス	創意工夫、継続性(粘り強さ)、科学的探究力の発揮など	<input type="checkbox"/> 実験・観察や調査等の方法が緻密であり、かつ自分なりの創意工夫が見られる。(※1) <input type="checkbox"/> 研究の進め方が計画的で自立的である。(※2) <input type="checkbox"/> 研究途上の課題や困難点に粘り強く、かつ柔軟に対処している。 <input type="checkbox"/> 幅広い知識を体系的に有し、多角的複眼的な思考力を発揮している(広い視野)。(※3) <input type="checkbox"/> 研究に求められる基礎的事項を自ら進んで習得している。 <input type="checkbox"/> チームワーク、他者との協働に優れている。(※4)		*1 実験観察結果の再現性、妥当なサンプル数の設定、対照実験による比較検討等の実験観察を行う上での基本的要件は、明示的な項目とはしていないが、発表に求める前提事項とする。 *2 教員の指導・アドバイスを必要に応じて自ら求め、能動的に受け止めることも自立的姿勢に含まれる。 *3 領域・分野横断的な知識と思考力を育成していくことは、科学技術分野での将来のリーダー、イノベーターとして活躍していく上で、重要な要件と考えられる。 *4 個人研究・学習の場合は、対象外項目とする。ただし、個人研究・学習の場合であっても、自分で研究・学習すること、他者との議論など(広い意味での「協働」)との双方を、うまく両立させていること。
成果	成果の水準と課題認識、将来への目標意識、今後の展望など	<input type="checkbox"/> 研究の成果・水準に対する自己評価が適切である。(※1) <input type="checkbox"/> 独自の発見・発明や独自の研究方法の開発など、学問分野やテクノロジーへの貢献が認められる。 <input type="checkbox"/> 現時点での課題認識が明快である。(※2) <input type="checkbox"/> 今後の課題解決に関する方法・手段についても自分の考えをもっている。 <input type="checkbox"/> 将来へのしっかりとした目標意識をもっている。(※3)		*共通: 研究成果そのもののみならず、活動を通して身についた力などの自己評価も適切であること。 *1 研究の成果については、研究で得られたデータや結果に基づいた考察が行われていること。 *2 課題が明確になっていること、かつ、課題解決の具体的展望を有することで研究・学習の継続的発展が期待できること。 *3 これまでの研究・学習テーマの成果の延長に将来の目標を見出しているという狭い意味ではなく、将来への努力の方向軸(自分の適性理解と理系進路への価値意識に裏付けられた「目標としての将来の自己像」)がしっかりしており、上級段階の学校への進学や大学進学後も継続的な科学的探究力の発揮と伸張が期待できること。
発表	プレゼンの明快性、わかりやすさなど	<input type="checkbox"/> 研究の各プロセスにおける自分自身の関わり・寄与が明確でわかりやすい。(※1) <input type="checkbox"/> 発表内容・方法がよく工夫されている。 <input type="checkbox"/> 論理展開に優れ説得力がある。(※2) <input type="checkbox"/> 質問に対する対応が適切である。		*1 研究の各プロセスで行った工夫や貢献など発表者の主体的な関わりとその成果をアピールできていること。(単に、決められた手順通り・指示通りに作業を進めただけ、という印象を与える発表は評価されない。) *2 結果の解釈などについて、従来の解釈にとらわれない独創的な解釈がなされることは望ましいが、「なぜそう考えたか」という根拠が示されていること。
総合的評価		<input type="checkbox"/> 高度で独創的な科学的探究能力を発揮している。 <input type="checkbox"/> 科学・技術の研究・学習への熱意が感じられる。 <input type="checkbox"/> 人・社会の切実な課題への共感と解決への熱意が感じられる。(※1) <input type="checkbox"/> 科学に楽しんで取り組むことができている。 <input type="checkbox"/> 将来への大きな成長、国際的な活躍が期待できる。		総合的に、次世代の傑出した科学者としての期待を高めるような発表であること。 *1 とくに実用的研究の評価に対して適用する。
				※注意: 総合的評価の得点のみ10段階評価とし、2倍の重み付けを行う。

# 「発表要項」の強調ポイント

---

## 1. 研究の意義: 自分の研究の意義をアピールすること

研究テーマの①学問領域にとっての意義(研究テーマの専門的な価値認識)、②社会に対して与える影響の大きさ(社会的な価値認識)、③自分自身の研究ビジョンにおける位置づけ・意義についての自分なりの理解を明記すること。

※前々回以来の継続した強調ポイントの一つ。

※「自分自身の研究ビジョンにおける位置づけ」とは、長期にわたる研究を要するものである場合、今回の研究がその最終目標達成のためにどのような位置づけ・ステップにあるものかを示すもの。

※人や社会の課題解決を志向した実用的な研究の場合は、その課題解決の貢献の大きさ、社会に対するインパクトについての理解も示すこと。また成果として、テクノロジーの進歩への貢献もあればそれを明示すること。

上の3つの観点が一つも記述されていない発表要旨は再提出とする(その結果、期日に間に合わない場合は、冊子の中で空白扱いとする場合がある)。

## 2. 研究活動における自分自身の貢献と成果の自己評価:

研究の中で自分が果たした役割、自分自身の独自の貢献は何かを明示すること。研究の成果の達成度合いを自己評価し明示すること。

※活動における自分自身の貢献を臆せず適切に語れることも、国際的に求められる資質の一つである。

# 審査・表彰の方法の概要

---

## 1. 実施機関から各2名の審査員の選出

・実施機関の審査員は、実施機関で選出(外国人研究者も可とする)。原則実施責任者または実施責任者が指名する者。

## 2. 実施機関審査員と推進委員会で「審査基準」とその適用の見直し・改訂

(→次のスライド参照)

→実施機関全体で周知・共有、受講生の指導に活かす。

「審査基準」は、速やかに受講生にも示して、担当教員からその趣旨を周知徹底し、趣旨に沿った発表の準備ができるよう配慮する。

## 3. 発表審査の実施と集計

- ・審査員に対して事前に審査可能分野の調査を行い、それを踏まえて発表に対する審査を割り当てる。
- ・次世代とグローバル別々に審査員を組むのではなく、双方クロスで審査を実施する(次世代とグローバルの審査員を別々にすることの可否は次年度以降検討)。
- ・発表者ごとの「審査シート」に基づき分野別に審査を実行(評価点の記入)
- ・個別の「審査シート」の評価点を集計

※審査員所属機関の受講生発表の審査は対象外とする。(評価点を集計から除外)

## 4. 審査評価点の集計結果に基づき、推進委員会での表彰者決定

- ・「中学生の部」「高校生の部」に分けた表彰を行う。
- ・実施機関審査員の評価点も含めた集計結果に基づき、発表会終了後、後日、推進委員会で、表彰者を決定